

西川隆範さんへの追悼文

西川さん貴方の温顔は私達の視界から突然消えてしまわれた。貴方は地上に生まれてきた使命を十分に果たされて、より高次の世界へ蟬脱された。貴方の高貴な魂は世俗が求める名誉や、地位など眼中になくシュタイナー学徒として霊学を日本に広め、超人的な集中力で膨大なシュタイナー著作の翻訳に没頭された。

そして何時しかシュタイナーのロゴスは西川さん、貴方に受肉して翻訳者に留まらず、日本の霊学を僧として語り始められた。

人は死ぬと決まっているものの勝れた人を失うのは悲しい。勝れた人と言うのは尊いメッセージをこの社会に齎す人のことだ。人皆はこの世の現実生活に追われて精神は低迷する、その様な私達に尊い指標を示してくれた貴方を失うのは悲しい。

より高次の世界に進まれた貴方と語ることはもう許されてはいない。しかし貴方は多くの言葉を活字として残された。我々が貴方の著書から学ぶ奥行きは深く果てしない。貴方の著書と、シュタイナーの霊学は知的興味から入る読者を阻むように理解である。然し魂の底から集中して読み進む時は現代語のストラとして我々の精神を至福に導く。

貴方が私に伝えたシュタイナーの「神秘的な進化のある段階で修行者は故郷喪失者」とよばれる」は私のその後の人生の指標となりました。

西川さん、私達は何時も永遠に至るまで広義の友愛の共同体の中にあります。

横尾 龍彦 (画家・東京自由大学特別顧問・前学長)

齋藤悠さんを追悼する

齋藤悠さんが東京自由大学に初めて現れた時、山折哲雄先生が現われたのかと見間違えた。ちょっと見には、よく似ているように思った。

しかし、ちょっと見だけでもなく、かなり似ているところがあるように思う。

一つ、老賢者で、東京自由大学の守護聖人のような存在であること。山折先生は何度も講師として「守護」していただいたが、齋藤さんには長い間「監事」として財政面を見守り、心配し、「守護」していただいた。いくつものアドバイスや提言もいただいた。没後も霊界から「守護聖人」として見守っていただいていると思う。本当にありがとうございます。

一つ、いつも、味わいのある淡い声で、「山折節」に匹敵するような独自の「齋藤節」を発信していたこと。山折さんは話芸の達人である。齋藤さんも同様であった。アジのある語りができるということは、それだけ、人生経験が豊富であるということであり、また、他者に対する洞察と配慮ができるということでもある。

一つ、死生観というか、死生観に基づく「姿勢慣」が出来ていた。その人ならではの人生味があった。生きるといふことの醍醐味はそのあたりにあるのだろう。

存在の香りを発していた。そんな齋藤悠さんに甚深い敬意と謝意を捧げた。享年81歳。本当に長い間、ありがとうございます。これからも末永くお見守りください。

鎌田 東二 (京都大学こころの未来研究センター教授・東京自由大学理事長)

加藤清先生を追悼する

加藤清先生に初めてお会いしたのは中国であった。承德という清朝の離宮のある都市にバスに揺られていた1991年3月のことだった。わたしは、そこにお医者さんが何人かいたのだが、加藤先生が精神科医だとは知らずに、「精神科医には変な人が多いですねえ」と大声で言ったのだった。その時、一番大笑いしたのが、加藤先生だったように記憶する。

だが、わたしの認識は浅曇だった。未熟だった。洞察不足であった。わたしは、加藤先生ほど「変な精神科医」を見たことがない。わたしの「変」さの「想定外」の「変」さを持っていたのが加藤清先生であった。凄かった、加藤先生は。

統合失調症（その頃は「分裂病」と言った）の患者さんの自傷行為を誰も止めることができなかった時、加藤先生は思わず「ゴミ箱」の中に入って「土下座」したという。その「変」さに、一瞬、自傷行為が止んだ。その瞬間から、患者さんと加藤先生との治療の関係が始まったという。

そんな加藤先生を慕い尊敬する多くの人々がいたが、創立以来、東京自由大学の顧問として「守護霊」ないし「背後霊」のように「守護」していただいた。その加藤先生の「霊性的見守り」によって、どれほど、経済的に不安定な東京自由大学に精神的な安定と「自由」が担保されたことだろう。加藤先生の聲に接しえた喜びを生涯忘れることはない。そして、加藤先生と共に対談集「霊性の時代—これからの精神のかたち」(春秋社、2001年)を出せたことも。享年92歳の天衣無縫なる神人加藤清。霊界に移行してもますます自由奔放なる精神療法を続けられることでしょう。ほんとうに、ありがとうございました。

2013年度ゼミナール報告

主催ゼミ 島園ゼミ「『無常』と『うき世』」 5/24.6/28.7/26(金)

— 日本人の死生観を考える — 加藤 一郎 (担当・運営委員)



講師：島園 進氏 (東京大学名誉教授・上智大学グリーンケア研究所所長・宗教学)

来年の講座で、島園先生のご専門、グリーンケアへの応用・展開をお伺いできるのが楽しみです。

今期の島園ゼミのテーマは「無常」と「うき世」であった。それらを仏教的に解釈するだけでは十分とはいえないようだ。そもそも、インドの初期仏教が無常を強調したのは、ただ修行に精進することを促すためだったらしい。うき世となると、仏教と関係があるかどうかすら怪しい。

島園先生からは日本の文芸史における「無常」と「うき世」の表現の変遷をたづむりうかがった。日本人の無常「観」であり、とくに詩歌における無常は「はかなし」といったフィリング的なものが多いようだ。

しかし、「無常」も「うき世」も、日本人の心情に深く根差した思想であることは間違いない。それらは二面性を持っており、無常や憂世が生活のつらさ・悲しさにつながるものであったとしても、無常のおかげでつらさを忘れることもできるわけだし、憂世を前に開き直ることによって浮世として楽しむこともできる。日本人の素晴らしい知恵なのかもしれない。

調査研究事業 「コロキウム」 毎月第3火曜日と第4木曜日、午後2時～5時

主宰：海野 和二郎 (東京自由大学学長)

21世紀人類の生存の危機は人類の進化の絶好のチャンスであり、天災から学び、エネルギー・地球環境・人口食料問題など直面する危機をいかに根本的に解決するかが課題である。地球や日本の構造と海野学長の専門である対流不安定性の関連、地震や異常気象の原因論、太陽熱発電装置による再生可能エネルギー問題を中心に、フェルマーの最終定理などを自由に討論している。

(海野学長「天災から学ぶ」<http://freegreen.jimdo.com/>第三号/海野和二郎/) をご覧ください。(報告：井上喜行(担当・運営委員))

事務局だより 井上 喜行 (事務局長) / 渡辺 恵実 (事務局員)

東京自由大学のウェブマガジン [the Earth of Free Green] 通称 [EFG] が2013年5月1日に創刊されました。ユース担当の高橋あいさんが担当、奇数月1日に発行します。東京自由大学ホームページのリンクよりお入りください。

●<http://homepage2.nifty.com/jiyudaigaku/> ●E-mail: jiyudaigaku@nifty.com

Newsletter Vol.21 2013年(平成25年)10月5日発行
編集・発行 NPO法人東京自由大学 / 事務局 〒101-0035 千代田区神田紺屋町5 T.Mビル2F TEL&FAX: 03-3253-9870
デザイン (有)アンビエンス / 印刷 (株)ベクトル

自由ゼミ 空海解明ゼミ「高野山 東西思想融合の地」

— 折口信夫「死者の書 続編」の視点から — 8/3(土)

講師：富田 弘子 (高野山大学密教研究会所属・会員)

密教の聖地高野山に、異端のキリスト教が伝わっていた。

民俗学者であり、国学者である折口信夫は、絶筆の書「死者の書 続編」において、秘密の空間高野山に西域の異教徒の痕跡を探り当てた。

空海が入唐した九世紀初頭、殷賑の大唐に伝わっていた景教とは、異端の宗派キリスト教ネストリウス派である。大日如来を教主とする密教と響きあい、混交した光の宗教・景教、その証跡が高野山奥の院に建つ「大秦景教流行中国碑」であり、東西の偉大な宗教の融合のモニュメントであるという。

折口の小説「死者の書」の舞台は、初稿が当麻寺であり、続編は高野山である。しかし、双方は密接につながっている。そのキーワードが「学文路(かむろ)」であり、「穴師」であり、「鬼人」であり、鉱山探掘者を意味する。彼ら稀有な芸術を操る異形の法師とは、空海の生涯を通じて、常に緊密な関係にあった渡来系技術集団の秦氏=禿(かむろ)=河童であった。



自由ゼミ 「きものリメイク講座」 5/18(土)

講師：クルス・さち=岡田幸子 (平面⇄立体作家・会員)

折紙、風呂敷、着物は平面が立体に変じ、再び平面に還元する。その不思議にひかれ、方形の布地から「縦横自在なベスト」「着るエコバッグ」「折形パンツ」等を創作してきた。

今回、「羽織⇄ベスト兼ジャケット」のリメイク (講義と実技) を通じて、「平面⇄立体」の体験を試みたい。参加者の皆様とチャクラ・御手に感謝。

編集後記 岡野 恵美子 (副運営委員長)

最近、東京自由大学にとってかけがえのない大切な方々が次々とご逝去されました。喪失感は甚大ですが、新たな力のある若者たちが支柱となって活躍し始めています。

老若男女が集い、協力し合って創りあげているカリキュラムはここが麗々としております。ぜひご参加ください。

特別企画 (ユース企画) 「震災解説事典 ～3・11の過去と未来を読み解く～」

前期の講座を終えて

辻 信行 (担当)

○はじめに

2011年3月11日。あの日を境に、私たちの目の前に広がる風景は、一変してしまった。津波によって押し流された家々、原発事故によって立ち入りが禁じられた街々。そして1万5千を超す尊い命が、失われてしまった。あの日から2年半が経過した今、震災をめぐる問題は山積し、なお深刻化し続けている。これから私たちは、どのように生きてゆけば良いのだろうか。きつとそのことから、私たち一人一人が考え、行動しなくてはならないだろう。

しかし、何も持たずにこの困難に立ち向かうのは難しい。そこで私たちは、『震災解説事典』という一冊の事典を作りたい。3・11の過去と未来を読み解いて、これから私たちが何を考え、どう行動すれば良いのか、そのヒントを探りたいと思う。

今年度はその第一弾として、震災の問題をめぐって各界で精力的に活動している6人の講師をお迎えし、事典の各章を作るリーダーとして、お話し頂く。

ここでは、前期に開催された第一章～第三章の講座の様子を報告することにしたい。

第一章：5/25(土) 「震災と環境」 講師：辻信一氏

(文化人類学者・環境運動家・明治学院大学教授)

辻信一氏をお迎えしての第一章では、「ポスト3・11のメンタルマップ」をサブタイトルに、初回の講座に相応しく、次々と重要な問題提起がなされた。

まず辻氏は、「ある問題を引き起こしたのと同じマインドセットで、その問題を解決することはできない」として、サティシユクマール、川口由一、ファン・デグオンらの「転換の思想」に学ぶ必要があると主張。

辻氏の講演は、震災を読み解くための3つのキーワード (①外部化 ②復興 ③賠償)、ポスト3・11社会を創るための5つのキーワード (①後ろ向き ②死 ③自然 ④コンス ⑤グローバル)を軸に進められ、特に「後ろ向き」「小さい」「縮む」「敗ける」といった、従来の経済成長論的発想でマイナスに思われてきたことこそ、ポスト3・11で目指される「グローバル」(ローカルに根差しながら世界に目を向ける)な生き方にとって重要であるとされた。鎌田東二氏との文学・動物・身体技法をめぐると対談や、質疑応答時の気功の話でも、弱きモノや小さくなることから見えてくる世界の豊かさに話が及び、会場は熱気で満たされた。



今年度後期の「震災解説事典」は、以下の通り開催いたします。

10月26日(土) 第四章「原発といのち」 講師：田口ランディ氏 (作家)

12月21日(土) 第六章「震災と宗教」 講師：鎌田東二氏 (京都大学こころの未来研究センター教授)

皆さまのお越しを、お待ちしております。

第二章：6/23(日) 「震災と民俗」 講師：赤坂憲雄氏

(民俗学者・学習院大学教授)

赤坂憲雄氏をお迎えしての第二章「震災と民俗」は、会場内が終始、心地よい静寂に包まれていた。それは、東北大学の提唱者として長年現地を歩いて来た赤坂氏の、どこまでも心に染み入る温かな「語り」が、参加者を魅了してやまなかったからである。

被災地で、震災以前は廃れていた民俗芸能が復活してきていることを皮切りに、『遠野物語』第九十九話は、語ることなしにいられないからこそ、伝わった話であるということ。赤坂氏のお母様の晩年を引き合いに、「生と死の狭間で、人は自分の人生と和解しようとする」。そして、身の丈にあう無尽のような金融システムの構築や、再生エネルギーの最先端技術をローカライゼーションに生かし、それこそを輸出していく必要性など、具体的な政策論まで話は展開された。



第三章：7/23(土) 「震災と言葉・詩」 講師：和合亮一氏

(詩人・福島市在住)

第三章「震災と言葉・詩」にお迎えした和合亮一氏は、福島市在住の詩人。和合氏の講演は、言葉の復興を目指す情熱によって支えられ、全身全霊で表現された詩の朗読は、聞き手の魂を揺さぶる圧倒的な迫力で満たされていた。そしてそのどちらにも、亡きものへ捧げる真摯な祈りが込められていた。

講演で紹介された和合氏によるTwitter上での1か月間の詩作をまとめた『詩の隙』と、5年をかけて完成させた『ふたたびの春に』という二つの詩集は、状況の中の詩と、時間をかけて練り上げた詩という違いがある。しかし、その違いをも軽々と超越し、両者を貫き通す一本の矢。それこそが、言葉という名の「祈り」であると、実感させられた。



○おわりに

前期の講座にご来場いただいた皆さまに、心より御礼申し上げます。

現代霊性学講座第三弾 「山伏と修験道～森のいのちの声を聴くワザ」前半報告

鳥飼 美和子 (運営委員長)



第2回：7/28(日) 「吉野修験と大峯奥駈道」

講師：田中利典氏 (金峯山修験本宗宗務総長・金峯山寺執行長)

まず、『修験道入門 大峯奥駈修行』のDVDを鑑賞。田中利典執行長はDVDでは山伏装束、会場には僧衣で登場。開祖・役の行者が大峯山で修行中に蔵王権現を感得したのが修験道の始まりとされている。ときは1300年前、内外ともに大乱の時期であった。蔵王権現は、悪魔降伏の相によって世を鎮静し、その青黒い姿に仏の慈悲が宿っているのだという。権現とは、まさに神仏混淆の日本的な存在である。金峯山寺は平安期から大きな力を誇ってきた。しかし明治政府の近代化政策より、神仏は分離され、修験道は禁止され、17万人もいた山伏、修験者が職を失ったという。金峯山寺も廃絶の危機に会い、天台宗の末寺として生き伸び、独立し、現代によみがえった。近代化によって失ったものは大きかった。日本的な宗教性は、習慣、習俗、慣習に溶け込んでいるもの。現在、それがまた見直される時期を迎えていると語られた。鎌田理事長とのトークでは、役の行者についてのお話しに会場から、今回の講師である宮家準先生も加わって、充実のひとときであった。

現代の修験道の牽引者お二人を続けてお迎え出来たのは意義深い。それぞれの特性や違いがありつつ、そこに共通するのは山の中での深い修行体験に裏打ちされた人間的魅力と牽引力、そして、人やモノや情報をネットワークし、プロデュースする力であろう。

後半は9/28に宮家準先生による「修験道の基本」、10/17に、坂本大三郎氏+関口亮樹氏による「修験道の未来」。御期待下さい。

たように思います。誰にでも必ず訪れる死の予行演習をしてもいいのではないかと大下大圓ご住職はおっしゃいましたが、確かにあるイメージを強く信じることで救われる心があると知りました。余韻が強く残りつづける体験をさせていただきました。

円空さんの笑っているような吽形の仁王さまを何度も思い出します。あの像を見るだけでも、行ってよかったと思います。でも旅は行って満足するよりも、予想以上のものと出逢い、あれもこれもとまだ接したいところがある、また来なきゃ、と心を残してくるものなのかもしれません。今回も「また行きたい!」をあちこちに残してきた充実した夏合宿でした。ありがとうございました。

<p>「飛驒の円空仏との出会いと、臨死49日体験」</p> <p>井上 ふじ子(会員)</p>
<p>心躍り、わくわく感で待っていた夏合宿</p>
<p>旅4日間で感じたことを反芻する日々の中、今日常生活の中、ふとよぎる千光寺さんでの体験感覚</p>
<p>飛驒の山、靈氣に開かれ読経と雨と満月 大下住職の柔らかな波動に触れ、厳しさを感じたことが住職の本を読み返し、確信に</p>
<p>円空仏をしみじみと思う。 位山周辺の気高さか。ほら貝の凜とした暖かさか</p>
<p>鎌田先生の声に送られ 幸せて贅沢な死出の旅立ち 蠟燭の光のもと、ドキドキしながら歩み 迎えられた温かさ……ここは曼荼羅の世界?</p>
<p>次の2日間で現世もどりのウォーミングアップ あの世とこの世は延長線上、表裏一体と</p>
<p>そんな旅を下さった自由大学に感謝 新たな人のつながりを下さった皆さまに感謝 西川先生に哀悼</p>

「2013年度東京自由大学夏合宿 充実のうちに無事終了の御礼」 鳥飼 美和子(担当)

東京自由大学は1999年の設立以来、毎年夏に研修合宿を行ってきました。日本各地の聖地、2005年には韓国まで足を伸ばし、訪れた地の風土に根ざした精神、文化、人に出会う旅です。

訪れる土地は企画、引率の鎌田東二理事長がこれまでの研究や活動で訪れた土地、縁ある土地から、その時の東京自由大学の活動にふさわしいところを選んでいきます。そのネットワークによって現地講師、同行講師の方々、協力者の方々にご協力をお願いしてきました。そのおかげで充実した旅を実施しつづけることができています。

今回は飛驒高山から金沢を経由し、東尋坊、永平寺を訪ねました。とくに柱となったのは、千光寺に滞在させていただく事でした。千光寺はたくさんの方を祀る飛驒高山の名刹。この夏合宿は、千光寺に滞在させていただくということから全てが始まったとも言えます。千光寺住職の大下大圓さんのご理解と多大なるご協力を得ての実施となりました。大下ご住職のご紹介で、高山在住のジャーナリスト萩原哲郎さんにもご協力をいただきました。千光寺を堪能させていただき、死生観ワークショップは他では体験できない特別なひとときをいただき、聖なる山位山を皆で安全に登拝できました。東尋坊で海と空の風光を愉しみ、旅の終わりに訪れた永平寺では東京自由大学の講師としてもお世話になった藤田一照さんに仲介いただき、特別拝観ができました。

ご参加のみなさんの感想文から、旅の折々の気配が蘇ってまいります。心を寄せあい、みんなで創り上げている東京自由大学、その意義を再確認する機会ともなりました。ご協力いただいた講師の方々、ご参加いただいたみなさまに心より感謝申し上げます。今後も東京自由大学の夏合宿をどうぞよろしく願いいたします。

の祈り、そして美穂子さんが、私に語りかけてくれるのです。

死者と対話することは、自分の奥深くつながる扉をひらくこと。

深い海の底で友海の声を探していたら、何故だか裸の赤ちゃんが現れました。赤ちゃんの顔は見えなくて、私であり、息子でもあり、母のようにも感じました。私の母は、私が幼い頃、結核で何年も入院していたらしいのです。そのときどんなに兄や姉や私を抱きしめたかったでしょう。母の悲しみをリアルに感じたとき、言葉にならないあたたかさにお包まれました。

この旅には、息子の骨をほんの少しだけ持参して、いつも一緒に祈りながら歩きました。美しく清らかな異界の地、千光寺での読経、対談、山歩きと死生観トレーニング。真っ暗な道をヨロヨロ、オロオロと、ただ美しい光に心を向けながら、足を選びました。息子はどこにどうしているのでしょうか。私は何処にどうしていられるのでしょうか。ただ遙かな場所から見守ってくれる、尊くあたたかな光に向かって、まっすぐに歩み続けなければいい……。

私の前には待っていてくれる人がいます。来た道を振り返れば、後ろから手を差し出す人がいます。その手をやさしく包み込めば、私もまた愛の光にやさしく包まれるのです。

なぜあなたは死なねばならなかったの？ どんな答えをもらっても、切なため息ももれる……。他には何にも望まない。あなたがあなたらしく、ありのまま そのままで、生きていてくれたらよかった。

友海はお母さんのこと、好きだった？ お母さんは、あなたがだい好きだよ。

私の裸の赤ちゃん。あなたはどんなときも輝いていたね。どこにいても、何をしても、ただあなたの幸せを祈ります。いつか背中の羽根を天にひろげて、風のようにしなやかに(喜・憂・歌・舞)と一緒に帰ろう。

生きとし生ける すべてのいのち、すべての裸の赤ちゃんへ

心からの敬意と愛をおくります。

ジョイ・バグワン。神ながら たまちはえませ

松倉福子 合掌

「歌でつづる夏合宿」 藤井 洋子(会員)

うつむきて咲く蓮華シヨウマの花の庭 来てよかつたな福来記念館	
千草咲く庭のその奥まじづかに 椅子に糸組み館守る人	(福来博士記念館)

暗き長き廊足早に吾が行けば ほのあかりする縁に出でたり	
本堂の緑の灯ほのほのと ゆらぐいのちのよるべのあかり	
ぬげたまの森の真間に吾を置きて しばし自然(じねん)に耳澄ませたり	(千光寺ワークショップ)

絶妙な垂直水平即思考停止 即ち座禅三昧	(鈴木大拙記念館)
---------------------	-----------

そこだけはまろき石積みうつくしき 垣の奥津城泰澄大師	(平泉寺白山神社)
----------------------------	-----------

なりものはならぬものなり手を尽くし をさめ鎮めしモノ起こすらし	
永平寺脇の祠の御前で ばうらばうらと法螺吹き鳴らす	(永平寺)

ときめくは旅の道具をとり纏めいざ死にゆかむと襟ただすとき	
ときめくは東尋坊の断崖に紀伊の御浜の花に会ふとき	
ときめくはよき先達に恵まれてまほろばの息吹(いぶき) 身にとほすとき	(橘曙覧にならいて「ときめくは」三首)

「余韻大きな旅」 中村 紀子(会員)

8月29日に叔父が亡くなりました。長患いでもあり、そろそろと覚悟もしていたため、心乱れず訃報を聞き、お見送りをしました。30人くらいのお坊様の長い読経と(叔父は僧侶だったため大きなご葬儀になりました)香に巻かれて手を合わせながら、いつの間にか浄土で大勢の人に迎えられている叔父の姿が浮かび、あら、これは死生観トレーニングのイメージだ、と気づきました。此岸で送られ彼岸で迎えられるというイメージを体でぞったことが思ったより心に残っていたことで、あの夜の経験が胸に落ち



す。倫理感の欠如した出来事が蔓延し、むしろそちらのほうが正しいのだと主張する人さえ現れ、しかもマジョリティーになりつつあるように思えます。特にひどいのは経済活動の面です。自分の欲望を満足させることのみを最優先にして、他人を貶めることになんらの罪悪感も持っておりません。良い例えかどうか分かりませんが、社会問題化しているようですが、アメリカ人の肥満の件など、自分の欲望をコントロールできないことの証左だと思えます。そのうちに何らかの鉄槌が加わるのではないかと思っています。

スタッフの方の綿密な計画ときめ細やかな配慮には大変感謝申し上げます。本当にお疲れ様でした。

「夏合宿三句」	石田 八重子(会員)
燭光に 導かれゆく 秋の堂	
身に沁むや 導師の言葉 生きねばと	
爽やかや 円空仏に 母の笑み	

「祈りの旅」 松倉 福子(会員)

東京自由大学の合宿は、いつも人生の節目を見守ってくれるような気がします。ご縁に導かれて訪れたどの場所も清らかで、美しく、聖地巡礼、鎮魂の旅となりました。皆さまに心より感謝申し上げます。

特に千光寺に宿泊させて戴いた二日間の密度の濃さと本堂の千手観音様のやさしいお姿、両面宿禰と円空仏のほとぼしるエネルギー、また最終日訪れた平泉白山神社の靈氣に満ちた佇まいは、深く心に残りました。

福来友吉の心理学研究所に始まり、鈴木大拙、橘曙覧の記念館で締め括られた合宿の大きな意味性を感じます。鎌田先生はじめ、講師の先生方、ご一緒した方々と過ごした時間は、まるで物語の絵巻物のように、やさしく心を揺らしながら、曼陀羅の中に織り込まれて浄化されていくようでした。

癒しと統合の時代に入るといふ、魚座から水瓶座の時代へ移り変わるその日(2012年12月23日)に、息子友海は、早すぎる現世の生を終えました。この数ヵ月の間の私は、私自身の中陰の時を経て、夏合宿の四日間を終えるとともに、ひとつの旅の終わりを静かに感じています。

人はあまりにも深い悲しみや絶望を体験すると、どこかで本当の痛みを感じないようにするため、心を閉じて自分を守ろうとするのでしょう。ようやく和らぎ始めた心は、更なるいのちの重さに向き合う準備を始めました。

三月の納骨までは、骨壺から息子の骨を出しては、並べて過ごしました。仕事以外何処へも行かず、ほとんど誰にも会わず、私はただヨガをやっていました。ヨガとともに、呼吸しながら、ぐるぐるする頭を空っぽにしようと思いました。やがて自分の奥深くに、穏やかな安らかなひらかれた場所を見い出せるように。

仕事があり、ヨガがあり、縁ある人が支えてくれ、そのときそのとき、絶妙のタイミングで必要な学びと救いの手に導かれました。ずっと前からこの悲しみと共にいられるよう学んできたかのように、フランクル、キューブラー・ロス、ブッダ、キリスト、平安

2013年度夏合宿

円空～位山～東尋坊～そして道元へ

2013年8月23日(金)～26日(月)

福来博士記念館 → 千光寺 → 位山 → 東尋坊 → 雄島 → 永平寺

「陽だまりの飛驒の秘・霊・裡」 木村 はるみ(会員)

京都からひとり降りた高山駅。駅前のレストランで飛驒トマトラーメンを食べて喫茶店で駅前の様子を眺めていた。はじめての東京自由大学の夏合宿参加は期待と不安で一杯だった。しばらくして見慣れた緑と白のストライプが見え、そこに東京自由大学の方たちが集まったのがわかった。バスに揺られてお山の上の千光寺に行く。

この合宿は仏教とスピリチュアリティを体で感じる旅であった。感覚を変える4日間だった。今でも思い出すと千光寺の境内の樹木の匂いや本堂の闇の中の観音像の光が甦る。弾むような太鼓の響きに合わせた般若心経の合唱に法螺貝と雷鳴。朝に位山へ登る足場の石の不連続な並びとそこに絡む木の根や枝、葉。最高齢参加者のシゲさんの手を引いて登った。暖かい手。人と手をつないだのは何十年ぶりだろう。所々に大きな大きな石が祀られてあった。下山して温泉。夜に自分の臨終を演じ、極楽まで行った。暗い廊下の先々に緑の光の道標が置かれて小さな魂を感じさせた。暗い廊下をひとりですくのは寂しい。私はこの道も傍らに誰かいるものであると思っている。その信頼がある。絶対に見捨てない誰かである。そこに宗教の力を感じているとも言える。三日目の東尋坊と雄島は日本の景観とは思えないダイナミックな岩肌と藍色の海に白波。土産物屋でソフトクリームを食べながら揺れるパラソルや親子連れなどの楽しそうな場面を眺める。白いテーブル。夏休み。

学問・文芸のメニューもあって、福来博士の記念館は鈴木大拙の記念館よりもリアルであった。橘曙覧の文学館はさらにその人に近づけた。日本の文人にこのような人がいたのかと感動した。これは大きな収穫であった。そしてもっと大きな収穫は、三日目のミーティングの参加者の3分スピーチ、そのどれもが魂からの言葉であり声であった。すべての人が自分を語っていた。この集団は守られている、そして守っている人たちの絆で輝いているのだと思う。最後に理事長は何を話すだろうかと待ち構えていた私たちに響いてきたのはやさしく美しい歌声であった。……鎌田理事長のみごとな御まとめには脱帽である。お世話くださったスタッフの皆様ありがとうございました。思い出はこころの奥にしっかりと留め、今後の人生を励ましてくれると思います。素晴らしい体験でした。

「東京自由大学の夏合宿に参加して」 廣田 敏之(会員)

ある程度の年齢になってしまうと余程の努力をしない限りなかなか新しい人との出会いはありません。東京自由大学の夏合宿は私にとってはそういう意味では色々な人たちとの出会いの旅であると思っています。

まず参加者の方、豊かな人生経験と知識をお持ちの方が多く、その一端に接するだけで十分感化されます。また現役で仕事をされている若い方ともお話をさせていただきましたが、皆さん素晴らしい感性をお持ちの方ばかりで楽しく話題が尽きませんでした。それぞれに見識を持ってしっかりと人生を歩まれていることも感じ取れました。

また講師としてお話をいただいた方はもちろん講師ですのでその方面での知識をお持ちのことと思っておりましたが、その幅の広さには敬服した次第です。

今回の合宿も今までと同様に精神世界を理解するメソッドに触れるということかと理解しています。色々な方法により更なる高みを目指すことは貴重な体験です。私自身現在最も気がかりなことはこの精神世界が大切にされていない状況にあることで

1日目 8/23(金) 千光寺宿泊

福来博士記念館→千光寺・円空仏寺宝館、山内八十八ヶ所めぐり→大下大圓師・鎌田東二理事長・萩原哲郎氏 鼎談



円空仏寺宝館



萩原哲郎氏/鎌田東二理事長/大下大圓師の鼎談



千光寺での朝食(茶がゆ・地元野菜の料理)



天の岩戸



49日死生観瞑想トレーニングの様子



位山山頂にて

3日目 8/25(日) 三国観光ホテル宿泊

鈴木大拙館見学→東尋坊遊覧船周遊→東尋坊散策→雄島散策→ホテルにて交流会



雄島のタブの木



雄島を背景に東尋坊にて

4日目 8/26(月)

平泉寺白山神社参拝→永平寺参拝→橘曙覧文学館見学→福井駅にて解散



平泉寺白山神社



永平寺(承慶殿)